



この序はイタリア歌劇の傳統である典型的なオペラ・ブロッコ（実験劇）の形式に従つたもので、従来のオペラ・セリア（正歌劇）の如く主人公の登場本位でなく、役どころが重なり合つてははれ、殊にこの種の歌劇特有の進化後バスの活躍が目立つてゐます。またアンサンブルの演奏も極めて劇的興味も餘蘊の一つです。

「序曲」はこの歌劇全體の概快の初期を豫想せしめるに十分であります。曲は緩急調の序で始まり、最初に管とバスとを以て強くやうな樂句が流れ、第一ヴァイオリンとフルートに移る。一般落がつくと全精力奏による快活なアレグロ・モルトが次ぎ、次いでフルートに短調の演奏が現はれる。二つの旋律が再進しつづつ巧みに練れ、ほくろで舞を、以下これらの樂材で、ワグネルの流儀に倣はれ、いよいよ、師匠な扱ひにより、腸に躍る清涼の如く舞いて流れる。

演劇について

二十世紀最大の相取として他の演劇を許さぬ最高權威者カスカーニエ（Cascardi）の著述による「セザリアの序曲」は彼の著述の中でも最も重要なものであります。非スカーニエはフルートとヴァイオリンでも手助けしますが、それ等の指揮振りの根本様式は彼が考案したものであります。このオペラの様式といふのは、管楽器をカンタービレ（Cantabile）で處理することです。しかしバスカニーニのカンタービレは、情緒に注れず強然としてをり、かつ、そのカンタービレの旋律が見事なフレージングと結び附いてゐることです。その點、トスカニーニはイタリア歌劇に於て彼の本領を發揮してゐると同時に、それはまた絶對に非難の餘地を與へないものであるといふことが出来ます。けだし、この「序曲」は完全に彼の演奏技術を披露したものと見て必聴すべき名盤であります。

